

「日頃の親子のかかわり」尺度の簡易版作成の試み(2)

萩生田伸子 埼玉大学教育学部教育心理カウンセリング講座

脇田貴文 関西大学社会学部

沢崎俊之 埼玉大学教育学部教育心理カウンセリング講座

キーワード: キーワード: 親子のかかわり尺度、 係数、 短縮版、 IRT

1. はじめに

沢崎(2010)は子どもの虐待を予防することを目指して大規模な調査をおこない、その中で36項目9因子(9主成分)からなる「日頃の親子のかかわり尺度(親子関係尺度)」を発表した。これに関連して、萩生田・沢崎(2011)は、養育者がより短時間でより手軽に親子の関係をチェックできる尺度にすることを旨として項目数の削減を試みた。これは内的整合性に基づいて項目の選定をおこない、9つの因子それぞれについて係数が最大となる(項目間相関が最大となる)2項目を残すという簡便な方法によるものであった。しかし、項目間相関のみに着目した場合と、肯定されやすさなどの項目が持つ特徴自体に着目した場合とでは、選出される項目に相違が見られる可能性も考えられる。そこで本稿では項目間相関が最大という基準で選出された項目がどのような特徴を持っているのか、因子ごとに項目反応モデルを適用することによって各項目の性質を改めて確認し、項目選択の方法について検討をおこなう。

2. 方法

分析の対象としたのは萩生田・沢崎(2011)と同一のデータである。すなわち、全国地域活動連絡協議会が収集したデータであり、子どもの学校種が小学校1年生から中学校3年生に該当する計10323名のデータを分析対象とした。先稿と重複する情報ではあるが、データの内容について再度掲載しておく: 調査は全国の母親クラブを通じて小学校4年生から中学校3年生の子どもがいる母親に依頼をする形式でおこなわれ、計5613名から回答を得ている。なお、親と子どもとの関わりについては、同じ家庭内であっても子どもごとに異なっていると考えられるため、調査協力者に複数の子どもがいる場合は第四子までそれぞれの子ども別に回答をするように依頼している。回答は36個の項目について「かなりあてはまる」「すこしあてはまる」「あまりあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」の4件法とし、それぞれの選択肢に対して4点から1点を割り当てて得点とした(反転項目と判断された項目の配点は逆順)。

分析は各因子ごとに(各因子に高く負荷する項目同士を同一テスト内の項目と見なして)PARSCALEを用いておこなった。適用したのは段階反応モデルである。その際、調査内容の性質から Guessing パラメータの導入は不要と判断したために、当該パラメータの推定はおこなわなかった。なお、項目ごとに平均点が高すぎる項目(ex. 「かなりあてはまる」を選択する回答者が非常に多い項目)または低すぎる項目の確認はおこなったものの、いずれも除外をせずに分析対象とした。

3. 結果と考察

個々の因子ごとに結果を検討していく。因子ごとに求めた項目パラメータの推定値は表1にまとめて示した(項目ごとのカテゴリ困難度パラメータの推定値は省略)。なお、表中のItem列の数字は項目番号、Slopeは識別力パラメータの推定値、Locationは困難度(位置)パラメータの推定値、S.E. はそれぞれの標準誤差を示す。

＜1. 親からの指示・叱責・説得＞

第一因子の項目特性曲線を図1に示す。左上から右方向へ順に『18. つまらないことで叱ることが多い』『19. 「ああしなさい」「こうしなさい」と子どもによく言う』『20. 子どもについ手が出てしまうときがある』、2段目左側から『21. 子どもが親の言うことを聞かず苦労することが多い』『22. 子どもの考えや意見がまちがっていると思うときには、親の考えや判断をはっきり伝えて説得する』の各項目に対応する(以下、図の配置は項目番号の小さいものから順に左上から右上、左下から右下とする。また、図の横軸は能力、縦軸は反応確率であり、4本の曲線は4つの選択肢に対応する)。

係数の大きさ(項目間相関)の観点から残された項目はNo.18、No.19であるが、識別力が上位の2項目となっている。当該2項目の困難度は低め～中程度であり、困難度が異なる項目という観点からはNo.20という選択もありそうである。

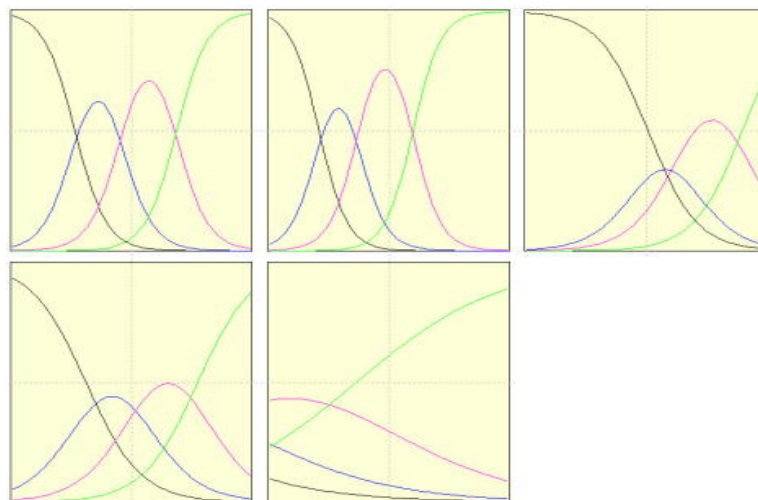


図1 第1因子の項目特性曲線

逆に、No.22の項目は識別力も困難度も低く(他の項目との相関も低く)、この下位尺度に含めるのには好ましくない項目であると考えられる。これはおそらく項目の内容が一般的な『しつけ』とも言えるものであったためかもしれない。

＜2. 共感＞

図2は第2因子の項目特性曲線であり、左上から右方向に『15. 子どもの友達について子どもと話す』『23. 子どものほうから話をする』『24. 子どもとコミュニケーションがとれていると思う』『25.

子どもをよくほめる』『27.子どもの気持ちがよくわかる』『28.子どもとのかかわりから、自分のことで気づかされることがある』『31.子どもの相手をするのは楽しい』である。

係数の大きさから残ったのはNo.23とNo.24の項目であるが、やはり識別力が上位の二つであった。位置パラメータは全体としてはマイナスの側に寄っており、肯定されやすい項目群であったと言える。なお、No.28, No.31の2項目は項目ごとの平均点が3.4を超えていた。

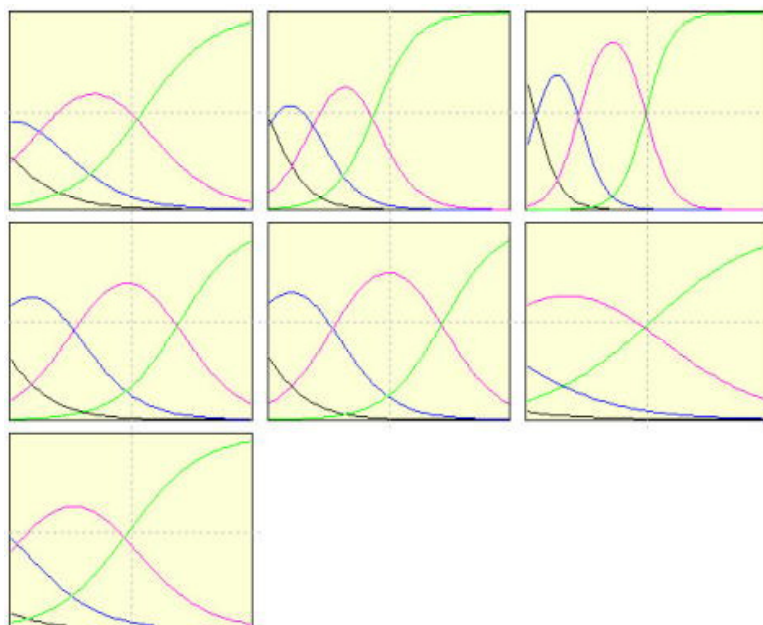


図2 第2因子の項目特性曲線

④. コミュニケーションの機会

第3因子を構成する項目群は、『1.子どもと一緒に食事をする』『2.食事をするときは、子どもといろいろなことをよく話す』『3.朝起きると、子どもと「おはよう」とあいさつする』『4.親子で楽しい時を過ごす時間がある』『5.休日に一緒にでかける』『7.一緒にテレビやビデオなどをみ

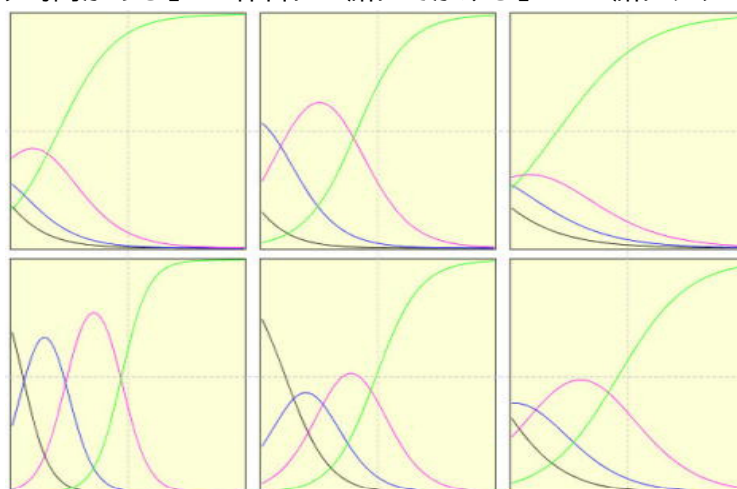


図3 第3因子の項目特性曲線

る』の6項目であり、それらの項目特性曲線を図3に示した。

係数が最大となる2項目の組み合わせはNo.4、No.5であったが、それらの項目特性曲線は下段左側の二つであり、表1に示した識別力が上位の2項目となっている。なお、『1.子どもと一緒に食事をする』の平均点は3.8を超えており、多くの回答者が肯定的に答えやすい(あてはまると回答されやすい)項目である。項目の性質の観点からは採用されない項目ではあるが、逸脱反応の確認という観点からは何らかの意味を持つ項目の可能性がある。

＜4. 親子の話し合い＞

因子4は、『9.服装のことで子どもと話す』『10.子どもの言葉づかいのことで子どもと話す』『11.携帯電話の使い方をめぐって子どもと話す』『14.将来や進路について子どもと話す』『16.自分の子どもの頃について子どもと話す』の5項目からなるが、その項目特性曲線を図4に示した。

萩生田・沢崎(2011)は 係数の大きさという点からはNo.9とNo.10の2項目を残すことが最良であり、次点としてNo.11とNo.14という組み合わせが考えられることを指摘しているが、識別力の大きさの点からは、No.9とNo.10の2項目を残す事が望ましいかもしれない。ただし、困難度は両方とも低め(肯定的回答をされやすい)である。困難度が異なる代替の項目という点ではNo.11は困難度がやや高めであり候補となりうるが、これは子どもの年齢によって肯定的回答となるか否定的回答となるかが異なる(小学校低学年の子どもには携帯電話を持たせていない可能性がある)ことに起因するとも考えられる。やはりこの因子に関しては子どもの年齢層ごとに採用する項目を変えることを検討してみる価値はあるかもしれない。

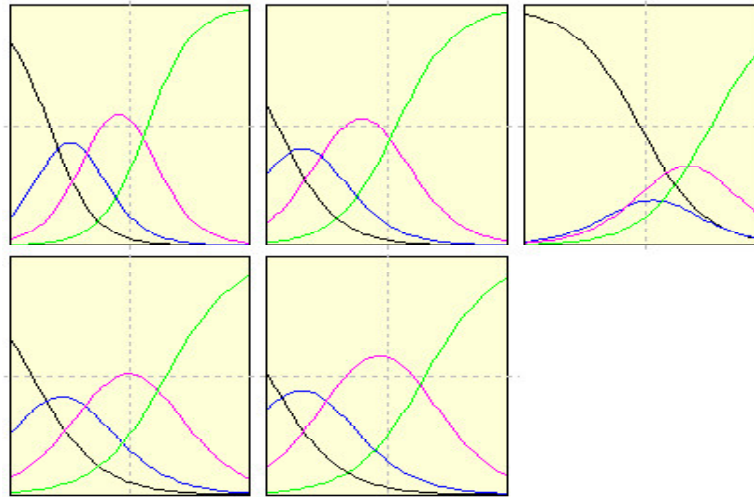


図4 第4因子の項目特性曲線

＜5. 身近な相談相手＞

因子5の項目特性曲線を図5に示す。左から順に『34.子どもの友人の親とは気軽に話しをする』『35.子育てのことを気楽に話せる友人がいる』『36.子どものことで不安や心配なことがあっても、身近に相談する相手がいない』の3項目の項目特性曲線である。ただし、この3項目はいずれ

も平均点が3.4を超えており(No.36は反転項目であるが配点を逆にする処置を施した)、かなり肯定されやすい項目と言える。

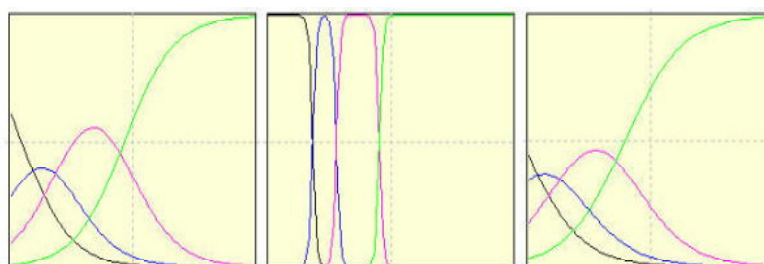


図5 第5因子の項目特性曲線

前稿で示したとおり、係数が最大となる2項目の組み合わせはNo.34、No.35であるが、推定されたパラメータ値をみるとNo.35は識別力が不自然に大きく、反復推定の過程で問題が生じている可能性が考えられる(求積点等、パラメータ推定の条件を幾つか変えてみたが、おおよそ識別力は5~14と大きいままであった)。その点で、No.35の項目については改めて検討が必要であるかもしれない。

<6. 宿題・勉強・ゲーム>

因子6には、『6.子どもの宿題や勉強を一緒にする』『12.ゲームの使用時間などをめぐって子どもと話す』『13.宿題や勉強をめぐって子どもと話す』の3項目が含まれるが、それらの項目特性曲線は図6に示した。

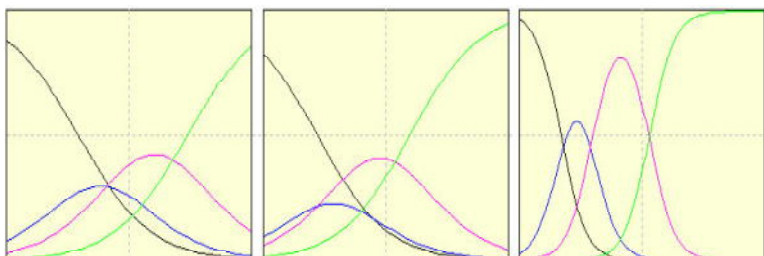


図6 第6因子の項目特性曲線

この因子に関しては、係数の大きさからは項目を減らさない方が好ましい(どの項目を除外しても係数は低下した)が、除外した際に最も係数の低下が少ないのはNo.6である(項目特性曲線は図6の左端)。また、この3項目中、識別力が相対的に低いのはNo.6とNo.12の2項目であるので、一項目を除外するのであればNo.6というのは妥当であるかもしれない。

<7. 親子のゆとり>

因子7は、『8.子どもとゆっくり過ごす時間がない』『17.子どもとゆっくり話す時間がない』の2項目のみが含まれる因子であったために項目の削減はおこなわないが、それらの項目特性曲線を図7に示す。識別

力は共に高く、どちらの項目も比較的性質の良い項目であると考えられる(項目間相関が0.6を超えており、尺度としてのまとまりがよい)。



図7 第7因子の項目特性曲線

㉘. 夫婦の協力>

因子8には、『32. こどものしつけでは夫婦の考えは一致している』『33. 子どもに問題が起こったときには、夫婦でよく相談して対処する』の2項目のみが含まれる。

ところが、この2項目に関してはパラメータを推定する条件を変更した際に、識別力等が正常に推定されないという問題が発生するケースが見られた。求積点等の条件を変更することによって推定がうまくいったケースの項目特性曲線の例は図8に示すとおりである。推定可能であったケースから判断すると、おそらくNo.33に関連して何か問題が生じていると考えられる。この点に加え、元々の項目が2つであるために特にこの因子に関しては新たに代替項目の作成を検討する必要があるようである。

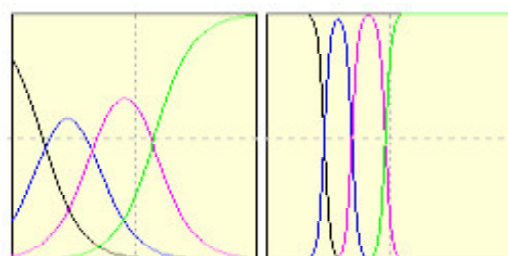


図8 第8因子の項目特性曲線

㉙. 子どもの育ちへの不安・甘やかし>

この因子は『26. 子どもを甘やかしている』『29. 子どものことで悩んでいる』『30. 子どもがきちんと育っているか、気になる』の3項目からなる。この3項目のうちNo.26についてはパラメータ推定が適切に収束しないが、項目特性曲線の例を図9に示す。図の左端がNo.26の項目特性曲線であるが識別力がほぼゼロに近づいている。なお、困難度(位置)パラメータの値が大きくなっているが、項目の平均得点は2.5程度と中間的であった。

係数に基づいて項目の選定をおこなった際、No.26の項目を除外すると 係数が最大となったが、この

項目は他の2項目と0.13~0.14程度の相関しかなく、通常は相関係数を確認した段階で除外されるような項目であり、そもそも、この下位尺度に含めるべき項目ではないと考えられる。

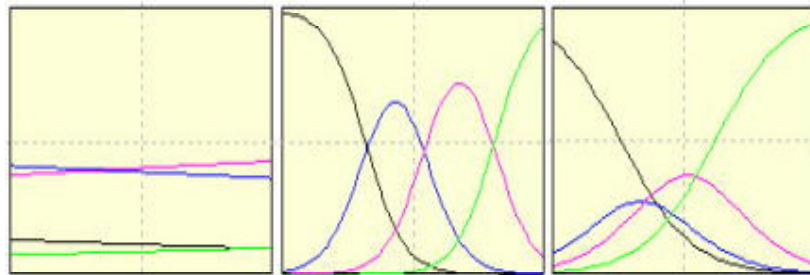


図9 第9因子の項目特性曲線

4. 考察

本稿では、先におこなった係数の大きさ(項目間相関の大きさ)を参照しながら沢崎(2010)の36項目9因子から各因子2項目ずつの計18項目を抜き出すという操作と、項目反応理論の観点から主に項目の識別力に着目した場合との比較をおこなった。

項目は全体として困難度は低めなものが多い。これは、項目を作成する際に聞き取り調査をおこない、日頃の親子関係で体験する内容を挙げてもらったことと関係するかもしれない。このような方法で項目の収集をおこなった場合、聞き取り調査等に協力的な層にとって日常的ではない事柄は回答内容にはほとんど出現しないであろうし、また、社会的に望ましくない内容(たとえば、子どもに対する暴力やネグレクト)は仮に親子の間で日常的に起こっていたとしても、『親子の関係』として挙げられる可能性は低く、項目として採用されなかった『親子の関係』は多様であろうし、その中には困難度が高い項目も存在したかもしれない。いずれにせよ、「日頃の親子のかかわり尺度(親子関係尺度)」は識別力が十分にあり、かつ、困難度が高めの項目はほとんどなく、その点での項目選択の余地は少なかった。他方、識別力に関しては、ほとんどの因子において係数の大きさを最大化するという条件下では好ましくないとして除外された項目は識別力が低かった。両方の点を総合すると、少なくとも今回調査をおこなった項目に関してはどちらの基準で選択をおこなっても大きな違いは出なかったと言える。

その他の若干の問題は、パラメータの推定をおこなった際に、適切に収束していないと思われるケースが見られた点であろう。今回は第5因子(身近な相談相手)および第8因子(夫婦の協力)において、当初設定した条件ではパラメータの推定をおこなえなかった(ただし、いずれも求積点を変更することによって取りあえずの解を得ることは可能であった)。また、第9因子(<子どもの育ちへの不安・甘やかし)ではNo.26の項目を加えて分析をすることは、パラメータ推定の条件を変えても困難であった。これらの点については別途検討が必要と考えられる。また、一部には性質があまりよくないと思われる項目が存在することを考えると、やはり代替項目を作成することを視野に入れる必要もあるかもしれない。

表1 パラメータの推定値

Factor	Item	Slope	S.E.	Location	S.E.
1	18	1.492	0.024	-0.197	0.013
	19	1.669	0.030	-0.648	0.013
	20	0.958	0.016	1.133	0.018
	21	0.855	0.011	0.215	0.017
	22	0.325	0.005	-4.022	0.032
2	15	0.675	0.009	-1.915	0.021
	23	1.171	0.021	-1.771	0.017
	24	1.812	0.043	-1.523	0.014
	25	0.786	0.010	-1.280	0.019
	27	0.853	0.011	-1.201	0.018
	28	0.429	0.006	-3.806	0.031
	31	0.646	0.010	-2.671	0.023
3	1	0.798	0.021	-3.022	0.040
	2	0.894	0.017	-2.382	0.020
	3	0.530	0.012	-3.280	0.046
	4	1.700	0.042	-1.497	0.014
	5	1.040	0.017	-1.261	0.016
	7	0.651	0.010	-2.039	0.023
4	9	1.043	0.017	-0.872	0.016
	10	0.815	0.012	-1.356	0.019
	11	0.719	0.013	0.680	0.020
	14	0.700	0.009	-0.860	0.020
	16	0.684	0.009	-1.132	0.021
5	34	0.976	0.014	-1.547	0.017
	35	13.525	1.963	-1.172	0.010
	36	0.832	0.012	-1.945	0.021
6	6	0.670	0.009	-0.004	0.019
	12	0.695	0.010	-0.674	0.020
	13	1.935	0.070	-1.016	0.013
7	8	1.690	0.043	-0.316	0.013
	17	1.671	0.042	-0.598	0.013
8	32	1.247	0.027	-0.928	0.015
	33	11.255	24.636	-0.913	0.013
9	26	0.031	0.000	1.984	0.333
	29	1.327	0.013	0.333	0.022
	30	0.727	0.030	-0.420	0.013

また、9因子というのは親子関係の特徴を簡便に把握する際には多すぎるかもしれない。沢崎(2010)では主成分分析を適用して第9主成分までを採用しているが、そもそも因子分析を適用した場合には第9因子まで採用するのにはやや難がみられる。この点からは、因子を整理した上で、改めて項目数を削減するという方略も検討の余地がありそうである。

5. 謝辞

本稿で使用したデータは独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者年金」助成事業の助成を得て、全国地域活動連絡協議会が収集した。また、調査には各地の母親クラブおよび関係のみなさまのご協力を頂いた。ここに記し感謝を申し上げる。

本研究は科学研究費基盤研究(C)課題番号23530880 質問紙を利用した調査研究における回答者の負担軽減と測定の信頼性・妥当性の検討の助成を得た。

引用文献・参考文献

沢崎俊之(2010) 母親クラブによる“地域の安全・安心対策と児童虐待防止”事業報告書 3章 児童虐待予防 63-89 全国地域活動連絡協議会

中村攻・沢崎俊之(監修)(2010) 母親クラブによる“地域の安全・安心対策と児童虐待防止” 全国地域活動連絡協議会(母親クラブ)

萩生田伸子・沢崎俊之(2011) 「日頃の親子のかかわり」尺度の簡易版作成の試み 埼玉大学教育学部紀要(教育科学)第60巻2号 65-72

(2012年 3月 31日提出)

(2012年 5月 18日受理)

